

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370103212		
法人名	有限会社キョーシン福祉会		
事業所名	グループホーム みずき苑		
所在地	熊本市北区龍田5丁目12-1		
自己評価作成日	平成26年1月20日	評価結果市町村受理日	平成26年4月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成26年3月10日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

古民家改修型で、高齢者には馴染みの、落ち着ける空間となっています。住宅地の中でも高台に位置する為、朝日が昇ると一日の始まりを実感でき、「今日も一日元気で楽しく過ごせますように」と毎日同じフレーズで手を併せていらっしゃる入居者様を、職員も全力でサポートしています。高齢化、重度化している入居者様が、人としての尊厳を保ち、毎日の生活に安心感と満足感を持って過ごしていただくことを念頭に置き、支援させていただいています。毎月テーマを決めて勉強会を開催し、外部研修の復講も行い、職員のスキルアップを図っています。また、サービス向上委員会、調理委員会を結成し、課題を解決できるような取り組みを行っています。運営推進会議の開催や校区事業所連絡会への参加、町内のサロンの手伝いに伺い、地域の現状把握や事業所としてできることを模索しながら、地域貢献にも努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

落ち着ける家屋、朝日を拝める環境にあるホームの中で、入居者は笑顔いっぱいの職員と共に穏やかにそして活気ある日常を過ごしている。開設して年月は経っているが、新管理者はあらためて地域の中で過ごすことの重要性を心に留め、持ち前のフットワークで近隣者にアドバイスを受けながら全職員で地域の一員となれるよう取り組んだ一年である。また、暑さのためせかくの外出行事が中止にするのは僥倖ないと、職員が出したアイデアは、庭先での『みずき苑ぶどう刈り』である。購入されたものではあるが、大粒のぶどうと麦わら帽子をかぶった入居者の笑顔が印象的な記録写真の数々であった。できないのではなく、できる何かで対応しようとするホームの姿勢が、今後ますます地域や家族との信頼関係を深めていくことであろう。今後も入居者にとっても最高の時間を過ごせるホームとなることに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	認知症の方の人権を尊重したケアを基本とし、理念に沿った目標の具体化に努めている。職員へ施設の考え方を啓発し、理念を共有できるように、勉強会などでの職員教育を行っている。	地域の中で入居者の「個人尊重」「受容と共感』『自由の尊重』をホームの方針とし、“いっしょに歩けばいい いっしょに笑えばいい それだけでいい それだけがいい”という理念のもと、全職員で家庭的な温もりのある介護に取り組んでいる。朝の申し送り時の唱和や代表者は機会あるごとに理念に沿ったケアについて話が行い、新人職員には管理者より説明されている。今後は更に理念への理解を深めて業務にあたることができるよう勉強会も予定されている。	理念についての勉強会も予定されており、入居者といっしょに歩き、笑えるホームになっていくと思われる。また、理念や方針について家族や推進会議の中でも説明を行うことで更にホームへの理解が深まることが期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の掃除当番や奉仕作業に参加し、相互交流に取り組んでいる。地域の方のボランティアの訪問などで交流を継続している。	今年度管理者は積極的に地域の人々への関わりを心がけ、不明な点は相談やアドバイスを受けホーム運営に繋がる努力を行っている。地区のサロンには、ケアマネジャーと共に参加し、交流を図りながらホームの持つ機能や地域貢献に努めたい思いを発信している。また、子ども会のメンバーが気軽に遊びに来てくれる機会も増えており入居者・職員は笑顔で迎え入れている。	管理者は今後の取り組みとして小・中学生などの福祉体験についても考えており、ホームの力を活かした実現に期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方へボランティア(折り紙)をお願いし、毎月一回来苑してもらい、入居者と触れ合うことで理解を深めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議には、自治会長、民生委員、地域包括職員、家族代表が出席し、活動内容や苑の現状を報告し、活性化を図っている。	できるだけ多くの参加となるようメンバーの都合を確認し開催日を決定している。会議の中では入居者の活動や職員研修会報告の他、疾病やケガを含め事故報告を行うなど透明性のあるものとなっている。また、参加者より認知症サポーターについて質問を受け代表者より説明され、講座の重要性について意見交換されている。議事録は玄関に開示され家族への共有に繋げている。	今後は家族の集まる機会に推進会議について再度説明を行うなど多くの参加に繋がる取り組みに期待したい。また、地域消防団にも参加を依頼し防災について話を受けることも有意義な会議となる一案かと思われる。防災対策の一つとしても検討いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	県や市のホームページなどから情報を引き出し、不明な点や質問は問い合わせを行い、助言を頂いている。	代表者は運営上質問があればその都度電話や役所を訪れ、アドバイスや助言をサービス向上に反映させている。今年度、市の実地指導で受けた推進会議の定期的な開催や、ケアプランの同意の必要性については改善を図り、取り組んでいくことが代表者より同会議の中でも表明されている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	勉強会で身体拘束の内容とその弊害について認識し、身体拘束をしないケアの実践に取り組んでいる。	虐待を含め身体拘束に関する研修会を開催し、共有を図っている。管理者はスピーチロックを含め、言葉使いについても気になる点があれば、申し送りなどの中で指導を行っている。職員は入居者が不穏になられた場合も、ホーム敷地内を散歩したり、眺めの良い庭先で気分転換を図るなどチームワークを持ってケアにあたっている。	安全上センサーマットを使用する場合は、家族の承諾のもと行われているが、状況については定期的な経過報告も必要と思われる。取り組みに期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会で高齢者虐待の内容と事例検討で、虐待の徹底防止に努めるよう、意識付けを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修会に参加し、勉強会での復行にて職員全員が学ぶ機会を作っている。権利擁護や成年後見制度のパンフレットを玄関に設置し、利用者・家族などにも制度の周知を図っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は契約書、重要事項説明書を詳しく説明し、質問を聴いている。また、改定時は同意を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情箱を玄関に設置し、意見を反映できるようにしている。家族会や運営推進会議で、意見や要望を聴き、その都度反映している。	家族会や推進会議をはじめ、面会時は近況を伝えながら意見や要望を確認している。また、公的機関の相談窓口については入居時に説明を行っている。昨年度、予定されていたぶどう刈りは、酷暑でもあり家族からも疲労を心配する意見が出された。代表者と職員は検討し庭先にぶどう園の雰囲気を作り、購入した大粒のぶどうを食するというアイデアで入居者の笑顔を引き出す最高の時間が提供された。	玄関先に意見箱が設置されているが利用には至っていないようである。今後は家族の満足度を確認するためにも、アンケートの実施にも期待したい。また、苦情対応簿については、家族への改善方法や取り組みなどがわかる様式の変更も必要と思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	朝礼時や勉強会の時に、現場の意見を聴き、代表者と協議し業務に活かせるように努めている。また、申し送りノートを活用し、職員全体に周知するようにしている。	朝礼や勉強会などで意見や提案を確認する他、代表者との幹部会で管理者は職員から出された内容を報告し検討されている。これまで併設デイサービスと合同で開催していた誕生会を別にすることで、更にゆっくりとした内容で進められるのではないかと提案により現在は、誕生者の好みのメニューを取り入れた献立により誕生会が開催されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	管理者、計画作成担当者との連携で、個々の状況を把握し、内部での勉強会の推進、外部研修への参加を推進している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修や外部の研修など、個々に必要なスキルアップの為に積極的に参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	校区の事業者の代表が月に一度集まり、意見交換や情報交換を行うネットワーク作りに参加している。グループホーム連絡協議会へも参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入時期は細かいアセスメントを行い、本人・家族の意向を聴き、支援のポイントを見極めるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の思いを傾聴し、ケアプランを作成して同意を得ている。また、随時、家族と密に電話で連絡を取り合っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族や入所施設の方などから話を聴き、初期の情報(サマリー等)からアセスメントを行い、ニーズを見極めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自立支援を心掛けており、時間がかかってもできることは自分で行ってもらい、危険のない程度で手伝いをお願いしている。お互いに支えあう環境作りを心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	年間行事や外出行事の際は、家族へ連絡し、参加を促している。来苑時には居室にてゆっくり触れ合う時間を作っている。状態報告や作品の紹介などをし、苑での生活の様子を知っていただくようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	親戚や知人の来訪を歓迎し、入居者さんと一緒におもてなしをするように心掛けています。隣接する有料老人ホームの方と日常的に交流し、言葉を交わされる姿が見られる。	入居者にとって大切な家族や友人・知人が気軽に訪問できるよう、職員は心から歓迎し次の来訪に繋げている。また、生け花や縫い物、干し柿作りなどが支援され、ぬり絵を得意とされる方で賞を受けられた入居者もおられる。リビングには入居者の書や手作りキルトバックが飾られている。	今後も入居者の馴染みの人や場所に加え、特技や趣味・こだわりなどを収集し、継続して取り組める環境の整備に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の性格・個性を把握し、スムーズにコミュニケーションが取れるように気を配り、食事の席などを決めている。環境作りに配慮し、「居場所」を大切に考え支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も、家族や知人の方がいつでも相談に来苑していただけるように、関係の継続を心掛けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプラン作成時や家族面会時に、本人・家族の希望や要望を伺い、希望や要望に添えるように支援を行っている。	職員は入居者と関わる中で個々に応じた語りかけにより、本人の思いを汲み取るように努めている。また、家族の面会時には居室やホールでゆっくりと過ごしてもらい、何か気づかれたことはないか尋ね本人本位の思いや意向を反映したプランに繋げている	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時、基本情報の聴取やアセスメントを行い、これまでの暮らしの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常生活状況について、支援経過記録や毎月担当スタッフとモニタリングを行い、現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月、担当者と計画作成担当者がモニタリングを行い、ケアの在り方をスタッフと話し合ったり、家族へ意思を確認し、プランへ反映させている。	計画作成担当者は担当職員とモニタリングの後、職員とケアのあり方や提案を確認し、本人・家族の思いや意向を組み入れたプラン作成を行っている。記録に関する研修会も開催され、個別記録にはプランに繋がる日々の様子や職員の気づきが詳細に記入され、計画作成担当者のプラン作成に活かされている。	管理者は新年度ケアマネジャーと連携し、プランに対する勉強会を計画中であり今後の支援に活かされることとされる。取り組みに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や気づきを個別記録に記入し、気になることは毎朝の申し送り時にカンファレンスを行っている。記録の重要性については、職員勉強会を実施している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	訪問歯科の利用 受診できない方の主治医の往診 専門医の往診 ボランティアの導入(折り紙)		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	折り紙教室や舞踊を地域の方をお願いしたり、近隣へ散歩し、下校中の児童に挨拶や声掛けをしたりしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者の高齢化も進み、体調不良時には往診が必要となり、苑の協力医をかかりつけ医とし、毎月状態報告をしながら、薬の調整をしてもらっている。他の医療機関への受診は家族による受診をお願いし、情報の共有を行っている。	ホームの協力医をかかりつけとして往診や定期受診を受けている。受診には職員が付き添い入居者の現状を伝えながら、医師との連携を図り、情報を共有してホームの生活を支えている。午前・午後のバイタルチェックで異常があればその都度再検し、看護職員と検討しながら観察の継続や、往診などの早期対応に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員の気づきを大事にし、普段とは違う状態の時には、看護師へ必ず報告するようにしている。看護師不在時には、オンコール体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は入院先にサマリーを持参し、申し送りを行い安心して入院ができるように情報提供を行っている。又、退院前には地域連携室のSWと面談し、状態把握を行っている。退院時にはサマリーをもらい、ケアプランへ繁榮させる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	随時、主治医と家族の面談を設定し、治療方針や終末期ケアについて説明し、同意を得るようにしている。その時は、ケアプランにも取り上げ、職員全員にケアの統一を図るようにしている。	入居時に終末期ケアについてホームの方針を家族に明らかにしている。本人、家族の希望があれば看取りまでの支援に応じることとしており、現在までに数例の経験をしている。支援に際しては往診医や家族と連携しながら、夜間帯には勤務者だけでなく他の職員が自発的に泊まりこむなど、互いの協力が家族の信頼となり、現在でも関係者との交流が続いている。	職員は支援の振り返りとして話し合いの場を持っている。今後は一連の流れや状況を記録として残し、これからの支援に反映されることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応についての勉強会を行い、緊急時の対応の本を設置している。マニュアルを作成し、慌てないように日頃から意識付けをしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災訓練を年2回実施し、有料老人ホームと合同訓練を実施。日々の安全チェックの記録も行っている。	年2回の総合自主訓練のうち1回は同時に地震を想定して実施している。入居者が机の下にもぐる行為が危険であることから、三角頭巾を手作りするなど消防署の提案も活かされている。本年度はスプリンクラーの工事により安全対策を強化し、夜勤者が建物周辺や火の元、コンセントなどの点検をチェック表に残し、加湿器は夜間帯は使わず濡れタオルで対応するなど、まずは火を出さないことを優先している。隣接する高齢者住宅との合同訓練となっており、声が届かない、避難済みの部屋に目印が欲しいなどの反省を次回の訓練に反映させたいとしている。	有事に備え水や食品の備蓄はあるが、その他に懐中電灯など必要な品を検討し、備えることや引き続き消防署への働きかけと、地域との協力体制に向け尽力されることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者の尊厳や身だしなみに気を遣うように、意思統一を図っている。重要書類は事務所で管理し、写真掲載など個人情報については家族の了承のもと使用している。	入居者への呼称は苗字や下の名前で対応しており、リビングでの和やかな会話風景が見られた。難聴の方へは職員手作りのノートを使い筆談で応じ、入居者が読み返しながら楽しんで居られるなど大切な対話手段となっている。入居者に合わせたゆったりしたケアが実践されており、管理者からも声を荒げるような場面が一度もなく穏やかな雰囲気であるとの話しが聞かれた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自室の飾りつけは自由にしてもらっており、馴染みの椅子や仏壇など持ち込まれている人もいます。又、食事に使用する湯呑みも慣れ親しんだ湯呑みをそのまま使用している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	レクレーション・入浴など希望を聴き、状態に合わせて自由に決めている。ゆったりとした時間が流れるように利用者優先の支援をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服装など季節や好みに合わせて応じ、入浴後の化粧水は個人用の物を使用している。散髪も2ヶ月に一度訪問にて行っているが、本人の好みを聴いてカットしてもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事盛り付け・配膳・下膳はできる範囲で手伝ってもらい、職員も一緒に食事をしている。みずき苑行事では手作りのバイキング料理を用意し、選択の機会を作っている。	調理担当の職員が中心となり、メニュー表を作成している。入居者も下膳やテーブル拭き、味見など出来ることで食に関わり、食事前後の挨拶を担当されている。職員一名が入居者と同じ食事を摂り、検食簿に評価を残しながらメニューに反映させている。テーブルを囲み賑やかな食事が終わると入居者の「上等はくらい」の懐かしい熊本弁が飛び出し、ホームでの日常が推察された。	エプロン使用を否定するものではないが、全ての料理に必要なかどうかまた、使用する場合には膝に流して使うなど使い方の検討をいただきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	調理部門の担当者が約一週間分のメニューを決め、バランスの良い献立になっている。水分摂取は制限がない方には、希望時にも水分補給を行うが、定時(毎食時と10時、14時、入浴時、就寝前)で飲んでもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個々のレベル・状態に合わせ、毎食後、口腔ケアの声掛けをしたり、見守り介助や全介助を行ったりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを把握し、オムツを使用されている方も声掛け・誘導によりトイレやポータブルトイレでの排泄支援に努めている。排泄時のプライバシーにも配慮した対応を行っている。	日中はトイレでの排泄を基本とし声かけや誘導のタイミングを見て個別に対応している。ポータブルトイレを使わない時間帯はトイレ近くで保管したり、排泄用品が目につかないようクロスをかけるなど、プライバシーへの配慮も統一している。以前は実施していなかった排便コントロールをチェックすることで個々の間隔を見極め、嘔吐などの異常に繋がらないよう早目の対応に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘によりBPSDが出現する傾向にあり、下剤を使用しながら排便コントロールはできている。主治医と相談したり、食事にも気を付けながら、自然排便があるように努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個々の体調や希望により、一日おきや毎日の入浴、シャワー浴を行っている。入浴日でない日は陰部洗浄を行い、尿路感染症を防ぐように、清潔を保っている。	1日に置きの入浴を基本として希望があれば毎日でも入れるよう準備している。家庭的な浴槽に時には入浴剤で気分を変え湯船に入ってもらよう2名体制で対応しながら楽しんでもらう工夫をしている。また入浴日以外でも入居者の清潔保持に努め快適な日常を心がけている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	血圧が低い方や下肢の浮腫みが強い方は、昼間ベッドへ横になってもらうようになっている。冬場は湯たんぽを使用し、気持ちよく入眠できるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の処方箋のファイルを作成し、職員がいつでも確認できるようにしている。与薬時には日付、名前、服用時間を声を出し確認し、誤薬のないように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の生活歴を知り、若い時の仕事や趣味などを職員が把握し、アプローチして回想できるように働きかけている。入居者の笑顔が絶えないように、毎日心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	お花見やバラ園に出かけたり、回転寿司で昼食を摂ったり、皆さんが楽しめるような外出支援を心掛けている。天気の良い日はテラスに出て、季節感を感じていただいたりしている。	公園での花見を楽しんだり、カントリーパークのバラ見学には家族に声かけし一緒に外出する機会を作っている。天気の良い日はデッキに出て日光浴やお茶でひと時を過ごし、外食の機会も支援している。今年度は外出の機会は少なかったが、プランターに花苗を植え成長を楽しむなど身近な環境での取り組みが日常的に行われている。	職員は外出を増やして行きたいと次年度の抱負を語っており、今後の取り組みが期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の能力・認知症の症状を見ながら、本人・家族の希望や意見を聴いて支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	要望があれば、職員が電話をかけて対応している。又、レクリエーション活動などで暑中見舞いや年賀状を手書きで書き、家族へ送ったりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	苑内には季節の花を飾り、温湿度管理や換気に気をつけ居心地よく過ごせる空間に努めている。ホールに日がさす時には、カーテンで調整するが、入居者の意見を聞きながら開け閉めを行っている。	古民家を改修したホームは画一的でない居室や空間が懐かしく、入居者に馴染みの場を提供し、決して広くないリビングだが入居者と職員が家族のように集まり、互いの顔を確認しながら共に生活している。玄関には入居者用の手作りバックがかけられ、折り紙の作品や季節の花がさり気無く飾られており、安心して暮らせる家となっている。	リビングと台所の間仕切りの役目をしている大型の食器棚を、小ぶりのものに変更し移動することで、スペースが生まれ互いの声を通じ一体的に使えるとして職員も検討しており、取り組みが期待される。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者のADLに合わせてテーブル配置を考慮し、環境面を把握しつつ、落ち着いた居場所作りをしている。トラブル時にはスタッフが仲介に入り、落ち着くまでは居室で傾聴をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には思い出の品や馴染の品が持ち込まれ、落ち着く空間となっている。	入居時には家族へ使い慣れた品の持ち込みを依頼しており、身の回りの品の他、心の拠り所として仏壇が置かれた部屋も数室見受けられる。ベット柵の手作りカバーや季節ごとの寝具の入れ替えなど、家族の協力も得られ一緒に居室作りに取り組んでいる。冬場の寒さ対策に一部の部屋には断熱ボードを使用するなど職員の気づきも活かされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室にはネームプレートを設け、トイレの場所がわかるように場所標記をしたり工夫している。自立歩行の方、車椅子の方それぞれに配慮し、安全に生活できるように努めている。		